

# 大嘗祭・即位礼と高御座の八角屋形空間について

報告：服部等作

## 1. はじめに

天皇の玉座、である高御座は、大嘗祭の行事の一つ即位礼の儀式に用いる<sup>(註1)</sup>。高御座の形態は、八角の天蓋を八本の柱が支持する八角形屋形(円堂)をなし、そのなかへ一世一元の皇位につく新天皇が昇段し、内部に備えた天皇の分身である御椅子と三種の神器<sup>(註2)</sup>をとめない神々に誓う即位礼が本年5月に行われる。即位礼の形式は、遣隋―遣唐使の時代に大陸との交流による中国文化の流入の影響を受け、後に仏式の即位灌頂も行なわれたが明治の王政復古により唐風から古い祭式に戻っている。

ここで注目する高御座の八角屋形の「八」を表象する形態は、飛鳥時代七世紀末、聖徳太子の霊廟と伝えられる法隆寺夢殿建築にたどることができ、さらに高御座の内部に設ける御椅子が暑い地域向けの網代座面や帛がけができる凭掛や笠木(横貫)構造から中央アジア、インド方面からの影響とともに中国を経由し日本に伝播したと考えられる。

本稿は、高御座の八角屋形の形態的側面について焦点をあてその西方的な影響を述べる。

## 2. 即位礼と高御座

高御座は、文安御即位調度図<sup>(註3)</sup>などから大正天皇の即位に際し1909年(明治42年)に古文書から復元し、大正、昭和、平成の新天皇の即位礼で用いた後に京都御所・清涼殿に保管された。2019年5月の即位礼に際し、補修後に分解し、輸送後に皇居・東宮御所で再組立した後、即位礼で用いる。[図1]

### 2.1 高御座の特徴的な八角屋形

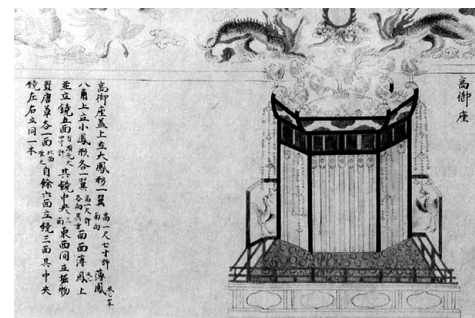
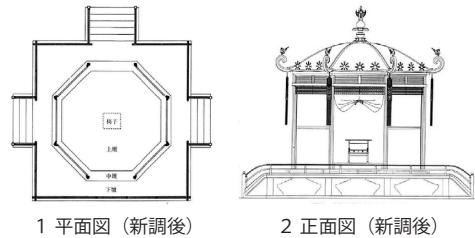
高御座の八角屋形の屋蓋は、柱上にのせ、下壇の木階段に高欄が巡り、上壇八本立て柱上の隅木鼻に蕨手、蓋頂上の方形露盤に蕨手上に大鳳凰がつく<sup>(註4)</sup>。下壇は赤地、中・上壇に青地敷物敷き、柱で囲む上壇の屋形内に御椅子、御帳台を置く。下壇左右に三段、背面に五段の木製階段がつき軒先各辺に鏡と唐草装飾を配し、柱間毎に御簾で分け内法の長押下に額を下げる。

高御座と内部に設ける御椅子の研究は、天皇家の秘儀、非公開的な関わりから十分な状況とは言えない。大嘗祭の儀礼研究は近年では岡田<sup>(註5)</sup>、吉野<sup>(註6)</sup>等がある。一方で高御座の形態と歴史研究は、井本<sup>(註7)</sup>が王権と王(皇)位継承からイランの八角表象を神話から内容を紹介し、また文化財復元調査から高御座の八角屋形の復元<sup>(註8)</sup>、内部に設置する御椅子は正倉院の木工調度調査<sup>(註9)</sup>がある。八角形象の形態内容は、後述する。

高御座の存在が不明な天皇制以前の古墳時代は、当時の死と再生、殯―王権継承後の律令制度の先行的内容がある。大王、豪族らが造営した古墳に出土する埴輪人物像は、椅子に腰掛ける、胡坐する二座法と立像があり、座具―座法の特別な性格を示し、他に平座像が琴や楽器を奏する歌舞音曲の場面や様々な器材埴輪

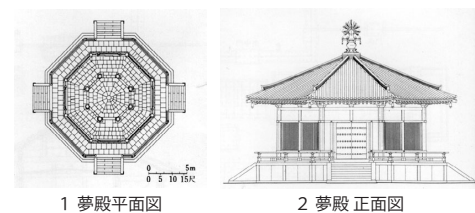
<sup>(註10)</sup>があるが、古墳上で大王や天皇(歴代王権、王統譜)の継体受霊記録と実態が不明である。

神話的内容で日本書記・神代記<sup>(註11)</sup>に新嘗祭と御席の記述は、六九七年(文武元年)文武天皇即位の宣命「この天津日嗣の高御座の業」天皇の高御座が象徴をなす点を示す。天を冠し天に通じる天皇を讃える万葉集の歌にも謡われ天を敬う「敬天」の指向が天と地、国土の隅まで八方を治め、七〇一年(大宝一年)大宝令の制定詔書で天皇表記中に「明神御大八洲天皇」、七二九年天平改元宣命「この天つ高御座に坐して天地八方を治め賜ひ調べ賜ふ事」とある事から高御座に着く威儀、正統性の一端が見える。



3 高御座図(文安御即位調度図)

図1 高御座



3 法隆寺東院夢殿屋形

4 内陣の八角基壇

図2 法隆寺東院夢殿

平安時代の宮殿・内裏で九世紀頃の高御座は、元日の朝賀の祝時に「前の一曰、大極殿において裝飾す」と高御座を敷く事、錦を以て実高御座の南、東西の壇上、敷く事両面を以てす、と記録され、…前の一曰、内匠寮の官人雑工らを率いて御斗帳を豊楽殿高御座の上に構え立つ」とあり平安前半まで椅子が節や旬儀で使い分けられている。平安中期で天皇の座は、敷物を敷く平座が「上敷両面二条、下敷布帳一条」と記録があり、高御座上に縹縷端畳二枚を先ず下敷に中敷がその上に同畳一枚を加えこの縹縷端畳の上に唐錦地の龍髭地敷、茵（唐錦と東京錦）を重ね敷くとある。平安後半は、御所・紫宸殿の板敷き上に平文の御椅子を立てた様子である。

鎌倉時代から高御座は、天蓋中央と八つの隅に鳳凰の彫刻を載せ、内部に鏡、幡、敷物の記録<sup>(註12)</sup>から後述する八角形で天蓋付き屋形の高御座を裝飾する手本となる。この頃、即位の儀礼は、天皇家の伝統的祭祀とのみ捉える傾向が強いが、一方で中世の即位礼では一時的に即位灌頂という仏教儀礼があった<sup>(註13)</sup>。

大嘗祭は、戦国時代の中絶後から江戸時代に入り東山天皇の貞享四年（1687）に一度略儀で再興し、次の中御門天皇朝に中絶した後の元文三年（1738年）後桜町天皇で本格的復興を果たす。その実施記録が朝廷・霊元天皇側の先例調査と幕府・徳川吉宗側にのこる。高御座の内部に御椅子を設ける組合せは、近代以降となる。

## 2.2 高御座の八角堂の仏殿形態

高御座の特徴づける八角屋形の由来は、八角状基壇をもつ古墳、および仏教東漸に伴い日本の仏殿建築からの影響が見出せる。

古事記に多目的な面で天皇が登場するが、一方で日本書紀に養老四年（710年）の神代から持統天皇（飛鳥時代）まで理由が判然としないうち「数字の八。拝火教信仰、ならびに西アジアの渡来人」に関わる内容も含む。

八角形の基壇をもつ古墳は、古墳時代末期（七世紀前半～八世紀初頭）の桜井段ノ塚古墳（舒明天皇陵）、野口王墓（明日香村）が代表的である。この背景には、築造技術の発達と大型古墳の造営また人物埴輪像、琴、威儀具の器財埴輪の出土から豪族の「来世の支配を現世と同様に示す」ため古墳での祓いと御禊の催事、

ならびに支配の継続意識が推定できる。大陸との交流は、古代中国の清明を尊ぶ祓除と鬻浴の儀礼<sup>(註14)</sup>や神事が伝わった推定可能だが一方で、証拠となる古墳の上で人や動物・獣物埴輪の供犠獣、継体受霊や動物食を用いる祭祀および崇仏者の聖徳太子や蘇我馬子の八角形古墳が見当たらず、また大王から天皇、八角形古墳の基壇から八角堂建立の移行期が不明である。

仏教と建物の荘厳は、百濟の聖明王が仏像、経、幡蓋を欽明天皇へ奉獻に始まる（538か552年）。飛鳥時代に聖徳太子と縁ある斑鳩の地で木造建築最古の法隆寺東院の伽藍に八角（平面）屋形の夢殿が738年（天平十年）僧・行信により建てられ、創建時の八角堂の本尊救世観音像が聖徳太子の姿を模して祀った時から太子の靈廟的性格が備わる。

夢殿は、四方扉で屋根に宝珠露盤を飾り、内陣の厨子が二層の須弥壇に八本の母屋柱を立て、元々の厨子の放射状の天蓋から下方に几帳を垂らしたとみられる<sup>(註15)</sup>。八角形の応用例は、東大寺法華堂（三月堂）の不空羼索観音像の八角形須弥壇がある。同形の須弥壇は、中国西域の墓から出土した帛にササン朝の獣文錦の円環の下方に2頭の馬が牽く荷台と八角の基壇状蓮華座に仏像をもうけ文様化し証拠となっている<sup>(註16)</sup>。[図6.2]

日本最古の八角形の當麻寺八角石灯笼があり、青銅製の灯笼が東大寺大仏殿前にある。光明皇后が聖武天皇追悼の東大寺開眼法要の歴史がのこる。

八角円堂は奈良時代末期の地方に及ぶ。五条・栄山寺八角堂（天平宝字七年・推定763年）は、夢殿より小形で内陣の四角柱など後世の改変が少ない。再建された夢殿は、高い屋根勾配と大型の軒に変化したのと同様に興福寺北円堂（養老五年・721年）とともに現在に至っている。[図2]

夢殿の八角表象は、建築以外に聖武天皇と中国の唐および西方由来に所縁ある内容も多い正倉院宝物の平螺鈿背八角鏡、玳瑁螺鈿八角箱、金銅八角長杯にも見出せる<sup>(註17)</sup>。

## 2.3 八角表象—西アジアとインド世界の影響

八角形の応用は、古墳の基壇や高御座の屋形にも応用されたが、西アジア・イラン、中国の建造物も多くあり、その内容に仏教伝播に伴う影響が考えられる。



図3 仏塔基壇構造  
(インド・サンゴール)



1. メナンドロス王銅貨 2. 金製メダイオン

図4 法輪の標章画像

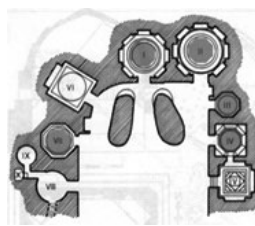


図5.1 東大仏八角形聖堂  
(パーミヤン)



図5.2 仏塔の蓮華座(左)と仏塔の八角屋形(右)  
(アフガニスタン・メセ アヤナク仏教遺跡)

八角を表象する西アジアの古い例は、人類史上最古のシュメール文明の都市国家期から新バビロニア時代まで初期の星を意味する米の八芒星の象形（神 dingir, あるいは天 = an）表現がある。王権が天から降臨するとする王権天授意識を反映したシュメル王朝表が正統化された<sup>(註 18)</sup>先例である。

古バビロニア時代から星は、意味が不明の円盤でこまめ、愛と戦争そして金星を象徴するイナンナ女神（イシュタル）となりアッシリア、ペルシャのゾロアスター信仰へとその神性が継承されている。

八角形の表象は、星形の頂点を結ぶと平面八角形となる。八角の屋根建造物は、ローマ帝国の領土拡大に伴い、土木技術による八角状の基壇があり、ローマ帝国ハドリアヌス帝霊廟（ローマ）、アウグストゥス帝八角形聖堂（バルセロナ）とギリシャ・アテネの八面の風塔（前1世紀頃）に及ぶローマ建築の様式が影響し、後述する仏塔を模した舍利容器の造形にもあらわれた。

ヘレニズム嗜好のパルティア帝国（前248 - 後255年）で方形建築に加えて三、六、八角ならびに多角形の組合せがすすみ、ペール神殿（シリア・パルミラ）内陣天井の装飾で六角形より八角形文様が多い。角形聖堂にアンティオキアの八角堂（331年）、カラトシマン・聖シメオン・スティリテス修道院（5世紀）、エズラの聖ゲオルグ教会（6世紀半）がある<sup>(註 19)</sup>。後のササン朝の美術は、メダイオンの連珠文に関心があつまるが、全体の文様構成では多角形の組合せを基調とするなか八角形文様を中心に円形連珠文が配置される。ササン朝の織物文様が東の正倉院に伝播したと同じく西のビザンチン帝国、イスラムの文化圏にも八角の聖堂建築が見いだせる。[図 6.1]

インドは、仏教が隆盛し仏像が登場する前の時代に仏陀を象徴する表象に法輪や仏塔が知られ、数字の「八」を象徴的に仏陀の生地から涅槃の地に至る八大聖地<sup>(註 20)</sup>（釈迦）、八仏世界を記す経典、他に仏陀の遺骨（舍利）を祀る八分配の争いが関連づけ、さらに仏陀の教えを象徴する法輪形の米図形、聖なる仏塔の基壇構造に応用する例がサンゴール、ピプラワ仏塔など多い。

仏教の伝播のなかでバクトリア朝（現アフガニスタン）メナンドロス王は、方形銅貨を発行（紀元前150 - 130年頃）し、その表・裏に仏教を象徴する法輪と聖牛、仏塔と法輪を表現した。王は後の「ミリンダ王の問い」に仏教に皈依したギリシャ人王として記されている<sup>(註 21)</sup>。[図 4.1]

テリアテペ金製メダイオンは、紀元前後の製作とされ、騎馬民族の有力者の墓から出土した。仏陀のゼウス風の像と王家の象徴である獅子、法輪を表現し、銘文も仏教の法と仏教をたたえる最初期の仏像とされる<sup>(註 22)</sup>。[図 4.2]

バクトリア・ビーマラン出土のローマ風の黄金製舍利容器は、八つのアーチ（仏龕）の下に仏陀、梵天・帝釈天、菩薩の合掌の像を配置する。仏像登場後も仏足跡に法輪、三十二相好の象徴表現

に手印で表わす。

法輪の表現は、仏像が本格的に登場して後にもクシャン朝のガンダーラとマツウーラの仏像の掌や足裏に表現した。建造物や仏塔の八角基壇構造、柱に応用され、仏像が八角形台座に置かれた。インドの農耕社会では四の倍数による思考がある。

中国の巡礼僧玄奘が巡礼途上に寄ったカピシ国（アフガニスタン）のバーミヤン西大仏、東大仏像石窟の後室に八角形堂を霊廟<sup>(註 23)</sup>に備え、この地には他にフィルハナ、カクラク石窟ならびにアフガニスタン・メセ アヤナク仏教遺跡<sup>(註 24)</sup>に八角形堂（仏塔）がある。[図 5.1-2]

イランの八角屋形は、12世紀頃のハフェジの八角聖堂（霊廟）が今も現存する。

## 2.4 聖なる八角表象—中国の影響

中国の四、八で表わす伝統が陰陽二気・五元論をもとに八卦、四方・四神、十二支に応用が見られる。皇帝の天祭祀で天を祀る天円・円壇とし、「地は方なり」と地（国家、国土）を方壇を祀り、八角が円の応用より方の概念が強いと『旧漢書・礼儀志』で示す。中国初の騎馬民族国家・五胡十六国（304年の前趙～439年の北魏統一）は、河西回廊に進出し、仏塔を模して八角石塔を建立設置した。代表的な428年酒泉高善皇穆造銘をもつ八角石塔は、北西インドの影響のもと各面に経幢、仏像や眷属、陀羅尼、ならびに道教の八卦文を加え記した<sup>(註 25)</sup>。

隋、唐時代にかけて明堂（神殿）の八角形祭壇があり、木造八角建築構造で最古の塔は、八角木製構造を忠実に模して磚を八角に積んだ石柱各面が陀羅尼を刻んだ会善寺の淨藏禪師塔（河南省登封・天宝五年746年建立）がある。基壇と塔頂の損壊があるが木構造の柱、斗拱各部を綿密に仕上げ塔の基本を再現した。[図 6.1]

盛唐時期の開元年間の石幢例は、低い覆蓮幢座上に8稜の柱形幢身を立て、柱頂八面に仏像を刻み、初期段階の石幢形式である。中唐以後、石幢が織物の幢幡形式の特徴をも取り込み8稜柱形の幢身上部に多層の傘蓋や屋蓋状に石盤をつけた六・八角堂の例が敦煌莫高窟・第61窟の五台山全図に描かれ、実際に五台山仏光寺に金光明最勝王経を刻んだ八角経幢が現存する。八角堂の建築は、遼代の山西省応県（現山西省）の八角形木造仏塔（高さ67m、遼・清寧二/1056年）の高層化へと引きつけられる。



図 6.1  
錦の八角基壇文



図 6.2 八角石塔

## 2.5 聖なる八角表象—日本

日本は、八角形の表象が古墳時代末期から仏教伝来や遣隋・遣唐使に伴い伝わる。唐に留学した弘法大師空海が帰国時に八角形の諸仏仏龕の請来もその一つである<sup>(註26)</sup>[図7]。由来の記録は、インドの密教僧・金剛智(671—741年)が唐にもたらした後、不空(705—774年)を経て、空海の師である恵果(746—805年)から大同元年(806年)に授かったと朝廷への報告書『御請来目録』に「刻白檀仏菩薩金剛等像一龕」と記録されている。仏龕は、南方産白檀材を八角柱状にした三面開閉式で総高23cmに上部がインド、ガンダーラの伏鉢状仏塔形にして中央を四、左右に各三区画にわけて諸像を配置する。緻密な造形の像は、北西インドのカシミール地方の特徴的な彫刻と造形の図像と技法が調和した優れた唐代の仏龕である。

## 3. 御椅子の特徴

ここで高御座の内部に設ける唯一国宝の座具の御椅子の発展の内容は、すでに解説しているためにここでは簡単に述べる<sup>(註27)</sup>。高御座は、新たな天皇が皇位継承の即位礼で主座となり、一方で御椅子は、神に誓いをあげる際に座具の役目を果たす。御椅子は、大正の即位礼で「赤漆欄木胡床」と称し正倉院南倉(67号御椅子)の残材を集めた品である。御椅子と同様に正倉院御物の多くは、天平勝宝八年(756)の聖武天皇崩御に際し光明皇太后による東大寺盧舎那仏献物で国家珍宝帳、東大寺献物帳に記録が多く残るため御椅子が正倉院北倉の天武から持統天皇にいたる継承品の赤漆欄木御厨子(御物第二号)と同材料、仕上げで製作されている。このため、東大寺大仏献納品(天平勝宝八歳六月二十一日)に記される「赤漆文欄木御厨子」が、天皇の継承品に類する点から即位礼、皇位継承と関連する。また牀とよばれるため中央アジアから中国を経て伝わった網代の座面、錦を凭掛と笠木(横貫)にかけることができる基本構成に特徴<sup>(註22)</sup>が見出せる点が注目できる。[図8、図9]

## 4. まとめ

高御座は、特徴的な八角屋形の形態を有し大嘗祭・即位礼で皇

位継承する新天皇の即位礼の主座となる。八角屋形の共通内容として、日本最古の仏殿建築である法隆寺東院の夢殿と高御座の空間が死—再生の象徴、すなわち聖徳太子を迎えた霊廟と即位礼で高御座が新天皇をむかえる空間性(=天子の御座所)を備える共通性がある。また高御座内部に備えた御椅子は、呪術的な象徴をもつ三種の神器とともに新天皇の分身ともなる玉座と同じ性格を備えた座具で分身役を果たす。

高御座と比較し英国王—英国国教会の頂点のウエストミンスター寺院で戴冠式に用いる玉座は、その座席下に戦利品のスコーンの石を尻で敷き呪術的で象徴的な品と共に新国王を宣言する<sup>(註28)</sup>。

## 5. 註と参考資料

- 1: 服部等作(2018):「大嘗祭・即位礼の高御座—分身の神話」、篠田知和基(編)、pp. 115-121 GRMC 比較神話学研究会、楽瑯書院、筑波大学茗荷谷校で9月1日発表内容に加筆した。大嘗祭は、<sup>にひなへ</sup>大嘗・新嘗、と元が同じ大新嘗の訳で、古代中国(礼記—王制)にある秋祭りの<sup>しゅう</sup>嘗、を借用し節を含め古代中国の信仰の内容も含む影響がある。平安時代の大嘗祭を大祀、即位礼を大儀と称した。明治四十二年制定「登極令」に公的制度化し大嘗祭と即位礼を一連して実施、一般的に御大典とよぶ。大正・昭和の即位礼と大嘗祭とあわせ大礼、天皇即位時の新嘗を大嘗祭とし年の収穫祝を新嘗祭と区別する。
- 2: 三種の神器(宝器)は、八坂瓊の勾玉、八咫の鏡、草薙の剣である。
- 3: 米田雄介(1991):「所謂文安御即位調度図について」、日本歴史(516)、pp. p77-83、日本歴史学会、江戸期の有職故実関係の模本「文安即位調度図」に高御座が示される。
- 4: 高御座の上・中・下三壇構成は(長方形下壇—正面6.06m×側面5.45m, 中壇(対辺距離正面5.5m×側面3.9m), 上壇(同4.95m×3.3m), 皇后用の御座(御張台)は、小形となる。平安時代中期に編纂された「延喜式」には、格式(律令の施行細則)から三代格式の一つを残し大嘗祭正殿建物が高御座と想起できる。そのうち巻第十六<内蔵寮>、巻第十七<内匠寮>がある。一方で大極殿と異なり四角い斗帳であった。豊楽殿



1. 諸仏仏龕—開扉した背面



2. 諸仏仏龕—開扉した正面

図7 諸仏仏龕(高野山霊宝館蔵)



図8 御椅子(赤漆欄木胡床)



図9 高御座内部の御椅子

- の記録は不明、
- 5: 岡田精司 (1989) : 「天皇代替わり儀式の歴史的展開, 即位儀と大嘗祭」, 柏書房,
  - 6: 吉野裕子 (平 2) : 「大嘗祭一天皇即位式の構造」, 弘文堂
  - 7: 井本英一 (1990) : 「王権の神話」, pp. 248-276、法政大学出版局
  - 8: 古尾谷知浩・箱崎和久 (1997) : 「高御座の考証と復原」: pp.22-23 奈良国立文化財研究所年報 1997.1 奈良国立文化財研究所、
  - 9: 木村法光 - (1992) : 「正倉院宝物にみる家具・調度」, 図版 21, pp.24, 1, 紫紅社、嶋倉巴三郎、村田源 (昭 62) : 「正倉院宝物の植物材質調査報告」正倉院年報 9、pp 25-27
  - 10: 服部等作 (2015) : 「古墳時代の椅子と人物の座法」篠田知和基 (編) 吉田敦彦他、神話・象徴・儀礼 II - 依田千代子教授追悼論文集 pp.171-180, 楽蔭書院、
  - 11: 「日本書紀・神代記」: 「新嘗之時, 素戔鳴尊, 則於新宮御席之下陰自送糞 ...」とある。  
孝徳天皇の白雉五年 (654 年) に「吐火羅國男二人、女二人」、齊明天皇の三年 (657 年) に「都貨邏國男二人、女四人」、同五年 (659 年) に「吐火羅國人共二人」、六年 (660 年) に「觀貨羅人乾豆波斯達阿」を伝える。
  - 12: 大江匡房 (1933) : 「江家次第」, 日本古典全集第 4、日本古典全集刊行
  - 13: 前掲 5、上河通夫岡田精司 (編) (1989) : 「中世の即位儀礼と仏教」, pp. 106-139、柏書房、
  - 14: 白川静 (2003) : 「漢字の世界 II, 一原始法の問題」, p 94、平凡社、
  - 15: 日本建築史学会 (1987) : 「日本建築史図集」, pp. 18-36
  - 16: 東京国立博物館 (2005) : 「中国美の十字路展」, 図版 126、新疆ウイグル自治区トルファン市アスターナ 101 号墓 1968 年出土騎士対獣文錦綉、新疆ウイグル自治区博物館、5-6 世紀 長 12cm × 幅 22.5cm、円環内の蓮華座は、写真を 180 度回転させた。
  - 17: 正倉院事務所編、朝日新聞社 (1987, 88, 89) : 「正倉院宝物 - 北倉・中倉・南倉」、宮内庁蔵版
  - 18: 前田徹, 尾形禎亮 (編) -1992: 「古代オリエント - 西洋史 (1) - シュメ - ルの社会」, 有斐閣 (10 版)
  - 19: Warwick Ball (1994) : Syria: A Historical and Architectural Guide, Scorpion Cavendish Ltd UK,
  - 20: Rana P.B.Singh (2003) : Where the Buddha Walked-A Companion to the Buddhist Place of India, Indica Books , Varanasi,
  - 21: 中村元、早島鏡正 (訳) (1963/) : 「ミリンダ王の問いーインドとギリシアの対決」、東洋文庫、7、平凡社、
  - 22: Hiebert F (2008) : Afghanistan: Hidden Treasures , National Geographic Magazine,
  - 23: Warwick Ball (1982) : Archaeological Gazetteer of Afghanistan-Catalogue Des Sites Archeologiques D'AFGANISTAN. Tome I-II, Asie Centrale, Edition Recherche sur Les Civilisations, Paris
  - 24: Ministry of Mines and Petroleum of Afghanistan (2014) : Mes Aynak Copper Project, Archeology Site Aynak 8
  - 25: 張宝爾 (2001) : 「甘肅仏教石刻造像」, pp. 35-69、甘肅人民出版社、
  - 26: 井上正 (1987) : 「檀像」, 図 6, 日本の美術, 235 号, 至文堂
  - 27: 服部等作 (2008) : 「正倉院・赤漆欄木胡牀と西方のイメージーシルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相」、科研費 (基盤研究 (A)) 課題番号: 17202018, 研究代表: 森安孝夫、<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/5054>
  - 28: Graham, Clare (1994) : Ceremonial and Commemorative Chairs in Great Britain, Pl.47, Victoria & Albert Museum. 歴代イングランド王の戴冠式で用いた玉座は、スコットランドのスコーン城の十三世紀末に溯る戦利品の石で、後代英国王の戴冠式から現在のエリザベス女王戴冠式まで用いた。英国王玉座は、座席に戦利品を敷く呪術的な象徴性をそなえウエストミンスター寺院に常置されてきたが、スコットランド独立機運の高まりで返還された。